

工作部門の存在意義を改めて認識する必要があります。大学定員の流動化に端を発する技術職員の高齢化、退職で現状維持も難しいような状況になっています。われわれの任務は、「ものづくり」の手助けで、ユーザーは芸術や体育で研究、教育に従事する人から、機械を専門にする人まで多岐に渡っています。このスペクトルの広がりがこの部門を特徴づけていて、図面を完全に理解し正しく自分のほしいものを表現することができる人は工学を専門にする人ですら少人数です。

この欠けた穴を埋める努力が非常勤の形ですが、2年前から、企業での経験豊かな人をこのユーザーのアイデアを正しく技術職員に伝えていく役割を担っています。工作センターから始まるこの部門の歴史は大学に特化する形で30年以上を大学の研究と教育の支援に費やされてきました。外部からこの部門を見ることはほとんどなかったのですが、上記に加え、運営の合理化にも新しい視点が導入されることになりこれも部門にとってはメリットと考えています。この流れから、この6月に工作部門の提案で物質・材料研究機構、産業技術総合研究所、筑波大学の三社協定のもとに「現代の名工に聞く」と題したセミナーが開催されました。この取り組みも部門にとっては学外の同様な現場の状況を知る上で重要でした。

「ものづくり」の重要性が日本のいたるところで謳われています。たぶん幾多の不況を乗り越え日本の発展をこれまで支えてきたのがこのものづくりにあるからでしょう。ところが、機械加工についていえば、いたるところでこれが破綻をきたしています。新興国の安い賃金だけでは補えないものを持っているはずなのですが、少子化による影響でしょうか、圧倒的に後継者が育っていないことが一番の問題です。特に腕に誇りを持った技術者の減少は由々しき問題です。上で紹介したセミナーでも明らかになりましたが企業は技術の伝承に多大の努力を払っています。

最近の技術関係のもっと具体的な話題で締めくくりたいと思います。なんと言っても最近の明るい話題は出発から7年間を費やした「はやぶさの帰還」でしょう。もちろんイオンエンジン等、いろいろな最新技術が投入されているのですが、これだけで成功はありえなかったと思っています。最後のパラシュートによる降下を始め、多くの洗練された技術工の技がなければ、これほど騒がれることにはならなかったのではないかと思います。ものづくりの技術は一朝一夕に成されるものではなく、定量化できない技が存在し、一度途絶えると修復は困難です。